

美という名のエネルギー

vol.7

栗原直弘
(古美術商)

第二章「美」の認識と発生④

とで、ご自宅が田舎の居酒屋のようになつている方もおられます。

二両の猫

前回の第二章の③でお話ししたように、この論考でいう「理の美」とは、それぞれの「美」を取り上げた人物や思想、その背景や時代を投影した「美」であり、その人物やジャンルに興味や知識がなければ成立しない「美」でもあります。故に、茶道に興味の無い人の中には、「時々猫が二両で売れるから」と、「井戸の茶碗」で猫に餌をやる人がいれば、民藝の形だけを真似たこ

取り上げた「美」は、彼らのようなある意味神懸ったカリスマが、それぞれのエネルギーとの直接的な感應によつて取り上げた「美」なのです。そして、彼らは「茶道具」や「民藝」のすべてを「美しい」と言つたわけではなく、たとえ同じ時代の同じ種類であつても、彼らが取り上げた物以外は限りなく日常の雑器に近い場合もあるのです。さらに、このような「美」は、時代や環境の変化によつて、それらを取り上げた

人や理念に対する評価が変われば、その価値や価格も変わる可能性があるのです。

しかしながら、無作為な造作物の中には「途轍もない美」を宿す物があることも事実であり、それは、ピアニストやバイオリニストが名演奏後に「何かの力に弾かされた。」と語るよう、人智を超えたエネルギーによって成される「美」が存在することも事実でしょう。

生まれ、その機能美ばかりでなく、人の手ずれなどの経年変化によって素晴らしい姿形となり、「途轍もないエネルギー」を宿すものが存在するのです。

「理の美」とは、このような炎の力や経年変化などによって生まれたエネルギーと同調できる特定の人々の「美」なのです。しかしながら、農機具などの手ずれなどは、特定の人が「美」と認めた時点の「美」であり、数ヶ月前、または、その数ヶ月後には、ただの古い実用品でしかない場合もあることも理解する必要があるでしょう。

「理の美」をエネルギーという観点で捉えれば、たとえ無作為な創造物であっても、その中には「神のいたずら」のような「美」のエネルギーを宿す物があると、私は考えています。例えば、「民藝」の中の農器具のように、無作為な人のエネルギーによって成された「美」は、彼らが感應した無作為の「美」のエネルギーを、彼らの工

エネルギーという観点

さらに、同じ「民藝」の中でも、利休や宗悦の精神的な後継者である、樂吉左衛門や古田織部、浜田庄司や河井寛次郎などによって成された「美」は、彼らが感應した

エネルギーで具現化したものであると理解しています。これらは一見「人の美」でありながら、彼ら自身がそれぞれの「美」の波長と同調することによつて作り上げた「美」の世界であると考えています。

「美」の評価と価値

第二章でお話しした三つの「美」を簡単に振り返れば、「天の美」とは「美」のエネルギーがそれぞれの存在に直接降りた物、「人の美」とは人に降りた「美」のエネルギーによって成されたかを理解していくこと、「理の美」とは「美」の工エネルギーによつて成された物、そして「理の美」は「美」のエネルギーが降りた人が取り上げた物と言い換えることができるでしょう。

そして、すべては「天の美」に始まり、「人の美」はその制作における技術と意識を極

めることで「天の美」に近づき、また経年変化などの「神のいたずら」によつて素晴らしい姿となつた「理の美」も「天の美」に帰結すると考えています。

この第二章で「美」を三種類に分けてお話しした理由は、皆様が鑑賞、蒐集しておられる「美」が、どのようなエネルギーによつて成されたかを理解していくことと、「美」の鑑賞と蒐集の意味を改めてお考えいただきたいという思いからなのです。何故ならば、現在の美術品や古美術の評価や蒐集が、他人や第三者の価値観や評価、マスコミの情報や金銭的な価値に翻弄なつていると考へるからなのです。